

## 1920年代「狂乱の時代」の登場人物たち

間瀬幸江

Mase Yukiie 宮城学院女子大学准教授

第1回・新連載

### 時代をはみ出す巨大なアイコン:ココ・シャネル

両大戦間期の最初の10年は「狂乱の時代」と呼ばれる。第一次世界大戦後の好景気に沸き立つアメリカが、一気に大量消費・大量生産のスタイルを確立し、世界に影響を与えた時代である。この連載では、1920年代を生きた人物を一人ずつ取り上げ、その人物を中心に、「狂乱の時代」とその後の20世紀に思いを馳せてみたい。

連載初回到登場願うのは、かのフランス人デザイナー、ガブリエル・“ココ”・シャネル(1883-1971)である。

「狂乱の時代」を語るのになぜシャネル?と思う向きもあるだろう。アメリカのシナリオライターが1920年代のパリにタイムスリップする、ウッディ・アレン監督の『ミッドナイト・イン・パリ』(2011)。ヘミングウェイ、ピカソ、ダリ、フィッツジェラルドなど、時代のアイコンがずらり並ぶこの映画に、シャネルの姿は見当たらない。

しかし、香水「シャネルの5番」が発表されたのは1921年であった。男の色とされてきた漆黒の「リトル・ブラック・ドレス」が女性たちをコルセットの締め付けから解放したのは1926年。1916年発表のジャージー素材の服は、やがて戦後の自由を謳歌するショートカットの女性「ガルソヌ」たちのユニフォームになった。みな1920年代の出来事である。

フランスでは、第一次世界大戦で自国の領土が戦場となり、塹壕戦や肉弾戦の最前線で兄や弟、息子や恋人たちが犠牲となった。その後を訪れたのが、若き表現者たちが我勝ちに咲き誇った、百花

繚乱の時代である。異国から訪れた画家たちのモデルとなるべくカフェに入り浸る女性たち、トップレスの踊り子たちに熱狂する観客たち、恋人を巡って争うアーティストたち——。戦争が人々の心と体に残した傷を覆い隠し忘れるための、陶酔と祝祭の日々であった。

しかし、貧しく生まれ、12歳で孤児になり社会から疎まれながら生きる地獄を知り、押し付けられそうになった結婚から逃走し、自分を賭けて上流社会のバトロンたちを恋人に持ちながらやがて独立を実現したシャネルにとって、戦争はむしろ追い風だった。戦地に向かった男たちに代わり女たちが社会に進出するなか、シャネルは300人もの女の針子が働く店舗を経営する実業家となり、財力という名の自由を手にした。女性に選挙権がなく、民法上の「無能力者」である妻には経済的自立が認められなかった時代のことである。

シャネルは、狂乱の時代の終焉と共に過去となった人々とは違い、他者と刹那的につながろうとはしなかった。むしろ孤独の中で、女性の自由という究極の夢を追いかけて生きた。1920年代の同時代人でありながら、狂乱の時代の鋳型はシャネルには小さすぎた。1956年に発表されたツイード素材の「シャネル・スーツ」は、人権主義政治家シモーヌ・ヴェイユや俳優ジャンヌ・モローなど、知性と女性性を旗印に闘う人々の「鎧」として愛され、シャネルの死後半世紀以上を経た今なお、現在形で輝き続けている。



チャズ・ラボルド『バーにいる2人の女性』  
Chas Laborde, *Two women at a bar*  
(1921).